

留学報告書 II (2020 年度留学生)

塾内在籍校・学年(派遣時)	高等学校 2 年
留学先校名	Winchester College
留学期間	2020 年 9 月から 2021 年 7 月まで

留学前

なぜ留学を志しましたか？また、留学を志した時期はいつ頃ですか。

父が仕事の関係で海外に単身赴任していた影響で海外への憧れの念が強く、小学校高学年・中学生の頃から、漠然と留学したいと考えていました。中学受験期に派遣留学制度を知り、慶應普通部を受験する理由の一つとなりました。普通部や塾高での説明会に参加したり、Winchester College の経済模擬授業を受講したりする中で、自分の成長の可能性を感じ、漠然とした思いが確証に変わりました。

派遣留学先には、どのようなことを期待していましたか？

派遣留学生の先輩方から、Winchester の伝統・素晴らしい設備・高い水準の教育については聞いていたので、自分はこの 1 年でどれほど成長できるのか、周りの生徒たちはどのような人なのか、大変興味がありました。近い将来 Oxbridge に進学をする生徒たちとの寮生活を通して彼らを知り、自分には何が足りないのか、また逆にどの能力ならば彼らと肩を並べ得るのかを解き明かそうという気持ちでした。それに加え、高校段階での留学で自己の将来の選択肢を探りたいと思っていました。自分は理系への進学、中でも医学部進学を視野に入れていましたが、自分がもし塾高に在籍をしていなかったとしても本当に同じ道を志していたのかという疑念を抱いていました。Winchester での多様な活動に参加することが自分の将来の選択肢を広げてくれると期待しました。また、漠然とした表現ではありますが、異文化体験を通じて、「説得力のある話し手」、「理解力のある聞き手」になりたいと思っていました。私が社会に出る頃には、同じ国に生まれ、同じ価値観を持つ人と仕事をする機会など現在よりも遥かに少なくなっているだろうと考えたからです。

留学を振り返って

Winchester College での一年間は私の期待を超えた充実した留学生活となりました。勿論、初めての異国の地での生活、慣れない言語の中での生活、コロナ渦における先が見えない不安に最初は戸惑うこともありましたが、不安材料は一つずつ取り除いていきました。

良かった点の一つとして、寮生活が挙げられます。実際 Winchester には半年ほどしか滞在していませんでしたが、寮の仲間と深い絆を結ぶ事ができたのは、寮生活のおかげであると確信しています。寮で 24 時間共に生活をしていると、自然と仲間意識が芽生えます。それは留学生の私も例外ではなく、短い留学期間でしたが、自分の寮に誇りを持ち、寮が学校の中で一番居心地の良い場所となりました。そのような仲間意識や、寮に貢献したい気持ちをぶつける場所として、一年を通して大小様々な寮対抗の大会が開かれます。私も寮に貢献するべく、寮対抗の科学コンテストである Wilson Pot では 4 年生ながらキャプテンを務め、また、寮対抗のクロスカントリー大会には寮の選抜メンバーとして出場しました。寮生活を通じて友人と絆を深められた事は、期待していた事の一つである”周りの生徒を知り、自分に何が足りないのか探る”を多いに助けてくれました。

また Winchester 特有の Div の授業では、周りの生徒の自分の意見を素早くまとめて発言する力、そして彼らの頭の中の引き出しの多さに感服しました。ただ物知りであると言うだけでなく、過去に学んだ豊富な情報を利用して自分の意見を組み立てる能力に秀でていると感じました。彼らの引き出しの多さはこれまで 3 年間の Div の授業で得た経験が少なからず影響しているのだと思います。また、塾高に比べ、多くの生徒が日常的に本を読んでいると感じました。例えば、同じ寮の友人の部屋にある棚は大量の本で埋め尽くされていましたが、本から吸収した知識が Winchester 生の頭の中の引き出しの多さに繋がっているのだと思います。一人一人の生徒が、本や Div の授業を通じて膨大な知識・教養を吸収し、寮に帰ってそれを友達と共有するのですから生徒達はさらなる引き出しを得る事となります。留学初期の頃、自分自身

が周りの生徒の、自分の意見を素早くまとめて発言する力に圧倒されているのは、私の英語力が周りに比べてまだまだ拙いからだと考えていました。しかし、今でこそ Div の授業には慣れたものの、留学初期の頃には日本語で同じことをやれと言われても自分にはできなかつたのだと思います。要するに、私は英語力の問題だと捉えていましたが、それ以上に、自分の意見を素早くまとめて発言するスキル自体が足りなかつたという事です。Div の授業だけでなく寮での食事の際にも似たような体験をしました。食事の時間にテーブルにつくと、一部の生徒たちがよく政治に関する議論を始めましたが、皆自分の考えをしっかりと持っており、感心させられたのを覚えています。

クラブ活動や課外活動など、学業以外の活動について教えてください。

年間を通じて端艇(Rowing)に参加する他、violin レッスン、ボランティア活動、オンラインでの物理学講義など複数の課外活動に参加していました。塾高のようにある特定の部活動に所属して活動するというよりは、曜日ごとにアクティビティを選択することが出来ました。一部、塾高の部会活動と同じ様に、特定の部活動に所属して活動するシステムの運動部もあります。

実際に参加した活動の中から 1 つ、Aeronautical Society についてご紹介します。これは、Pre-U や A-Level では範囲外である流体力学や、航空力学の基礎を学び教え合う勉強会のような Society(文化系部活動)です。クリスマス休暇あたりから案を練り始め、3 学期に友人と共同でこの Society を設立しました。週 1 回、1 時間のセッションを行い、生徒が他の生徒に向かってプレゼンテーション形式で講義をする形を取りました。先生に講義をお願いする案や、輪行形式で一冊の本から学習する案なども検討しましたが、他人に教えることで自分の理解が深まることや、プレゼンテーションの練習にもなることなどから、この形式を採用しました。また、プレゼンテーションの際には顧問の先生が内容に誤りがないか監督して下さいました。Society 設立者の友人と私は、Society の運営が軌道に乗るまでの全講義を引き受けました。第 3 学期中には全 6 回のセッションがありましたが、第 1、3 回目は友人が第 2、4 回目は私が発表を担当しました。第 5 回目のセッションからは他の生徒も講義を引き受けてくれるようになり、ようやく交代制の講義がスタートしました。自分が得た新しい知識をもとに 1 時間のプレゼンテーションを作るのは簡単なことではなく、自身初めての講義の際には苦労しましたが、2 回目からは慣れ始め、大まかなスクリプトでプレゼンテーションに臨みました。Society を設立する際には周りの先生のサポートもあり、自分でも驚くほどスムーズに事が進みました。Society を作りたい旨を物理科の担当教員に伝えると、物理科の教員会議で取り合ってもらい、すぐに顧問の先生が決定しました。顧問の先生は航空関係のエンジニアとしての職務経験もある、物理科の先生が引き受けて下さいました。実際のミーティングには多い時で 20 人、少ない時で 8 人の生徒が参加してくれました。また、風洞実験装置が学校内にあり、生徒は誰でも使うことが出来たため、Society の活動に大変役立ちました。

学校内や寮内で、コロナ対策としてどのようなルールがありましたか？

基本的にはバブルを守って生活するように指示がありました。一番大きいバブルの単位は寮で、同じ寮の人と話す時にはマスクを着用しない事が認められていました。寮よりも小さいバブルの単位として、同じ寮の 4・5 年生のグループがありました。この小バブルの中でコロナの感染者がでた場合には、小バブルの全員が隔離しなければならない仕組みになっていました。

他にも、学校のキャンパス外に出てはいけないなど様々なルールがありました。6 月になると、Winchester の街に出かけられるようにはなりましたが、公共交通機関の使用は依然として認められませんでした。また街への外出許可が下りたと同時に、月曜日と木曜日の週に 2 回、コロナウイルスの簡易検査をすることが求められました。

学業について

○授業のシステム

私は応用数学・化学・物理・Div を履修しました。今年から Winchester College は Cambridge Pre-U に代わり、A-Level を導入しました。Pre-U も A-Level もどちらも大学入学資格として認められる 2 年間の制度ですが、一般的に A-Level の試験では基礎的な問題が多く出題されます。ただし、Winchester での授業内容は昨年までの内容とはあまり変わっていません。

全ての授業は 1 クラス 10 人前後の少人数制になっており、先生と生徒との距離が大変近いです。そのため授業内では発言を求められる事が多く、また質問もしやすい環境でした。

Winchester の生徒には常に科学オリンピックへの参加が視野にあり、私も Senior mathematics challenge と物理オリンピックに参加しました。Senior mathematics challenge では本戦 (British Mathematics Olympiad) に進み、Certificate of Distinction を頂きました。

今年から A-Level に変わった事で、新たに EPQ(Extended Project Qualification) という科目が追加されました。これは“自由研究の時間”のような科目で、最終的に 5000 語のエッセイを書く事が求められます。週 6 コマの Div の授業の内、2 コマが EPQ を進める時間となりました。研究というよりは、調べ学習の側面が強く、最終的なエッセイよりもエッセイを執筆するまでの過程に重きが置かれておりました。美術作品などの制作も認められていて、その場合には 1000 語のエッセイを書く事が求められました。私個人としては、イギリスの臓器移植制度(opt-out 制度への転換とパンデミックが与える影響)についてのエッセイを書きました。先生に頼んで OB の医師の方に繋いで頂いたり、引用の仕方説明講座が開かれていたり、サポートは手厚いように感じました。

○試験について

11 月と 6 月、計 2 回の試験がありました。11 月に行われる試験は第一学期の中間試験、6 月に行われる試験は学年末試験という位置付けでした。Winchester の 4 年生はこの 6 月に行われる試験と、5 年生になってすぐの 9 月に行われる試験によって大学に出願する際の予想成績が決定するため、6 月の試験はやや張り詰めた雰囲気でした。試験は 1 教科あたり 120~150 分と大変長いものの、その分試験科目は 3~4 科目と少なめでした。A-Level の最終試験ではあまり応用問題は見受けられないことから、発展問題のような問題はあまり出題されませんが、試験範囲が膨大なため試験勉強は塾高と同等、またはそれ以上に大変でした。また塾高での試験とは異なり、試験期間中も課外活動が継続するため、多くの課外活動を行っていた自分は、課外活動と試験勉強の両立に苦労しました。

これは私が驚いたことですが、対面授業とリモート授業自体にそれほど違いはありませんでした。リモート授業では Microsoft Teams を活用し、常に先生や生徒の表情を確認することができるため、先生や他の生徒コミュニケーションを取るには何の不便もありませんでした。また、先生は Microsoft OneNote に板書をし、それを生徒に画面共有しながら授業を進めます。対面授業の際でも、ほぼ同じ方法(先生が OneNote に板書し、それをプロジェクターで前のホワイトボードに投影する)で授業が進んでいくため、リモート授業に違和感はほぼありませんでした。生活スタイルについては、対面授業とリモート授業で大きく変化しましたが、授業自体で変わった点は物理・化学の実験の一点だけです。勿論リモート授業では実験ができないため、リモート授業期間の終了後、対面授業が再開してから実験の補習が行われました。

今後の派遣留学生へのアドバイス

Winchester には慶應からの派遣留学生以外、留学生はほぼいません。(2020 年度は私一人のみでしたが、例年は数名の留学生が数週間程度 Winchester に滞在するようです。) そのため、自分から留学生だと言わない限り、周りの生徒もあなたのことを Winchester の正規生だと思っていることでしょう。せっかく皆が正規生と同じように接してくれるわけですから、派遣留学生である事は常に意識しつつも、一 Wykehamist (Winchester College の生徒の総称) としての誇りを持ち、一年間を過ごして欲しいと思います。これだけは確実に言える事ですが、留学期間の 1 年間はあっという間に過ぎていきます。定期的に自分と向き合う時間を作って、悔いのない 1 年間にして下さい。

以上

